発達理論の学び舎

Back Number: Vol 125

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

2481. 内側から自己を開く道

2482. 夢の中の複雑なマンション

2483. 上昇を希求する夢とデッサンの実践

2484. 静謐な感覚を通じて

2485. この剥き出しの直接感覚

2486. 世界と共に生きるということ

2487. 学会とギフトショップに行く夢

2488. 今日と明日以降の取り組み

2489.「絵画を聴き、音楽を描くこと」に向けて

2490. コンポジションセラピーの可能性

2491. 儚さを超えた永遠の関与

2492. 帰るべき場所に向かう夢

2493. 弁証法的発達プロセス:帰るべき場所に向かって

2494. 考えるべきことに向かって

2495. 研究の進展:ツショル教授との久しぶりのミーティングより

2496. アムステルダムとロンドンでの学会に向けて

2497. 長い冬の時代の終わりに思うこと

2498.「自分自身であれ」及び内的曼荼羅

2499. 絵画的なものと音楽的なもの

2500. 成人発達理論の普及に関する危機感

© YOHEI KATO 2018

2481. 内側から自己を開く道

今朝方、新たなものを創造していこうという明確な意思と共に目覚めた。今朝は六時半を少し過ぎた時間に目を覚まし、早朝の習慣である身体運動を行ってから、自らの身体を一日の活動の開始に向けてゆっくりと調整をしていった。

身体がいかに大切かを実感する日々。身体は、日々の活動を一歩一歩前に進めていくための土台としてあるだけではなく、日々の充実感と幸福感の基礎は身体の状態に強く依存している。

昨日はもしかしたら少々身体に負荷をかけていたかもしれないと反省をする。特に脳に対する負荷が大きかったように思う。情報が脳にそれ以上入らないというような拒絶状態が起きるまで脳を酷使してはならないように思う。その手前で情報を取り入れることを中断する必要がある。

昨日は論文執筆に際して、先行研究に関するいくつかの論文を読んでいた。論文の執筆や協働プロジェクト関連の資料を作成することに加え、日記や作曲などの創造活動に従事した後に他者が執筆した論文を読むことは脳に対して負担になっていたようだ。

仮に他者の執筆した論文や書籍を読む場合には、少なくとも自分の脳が喜ぶようなものを適切に選んでいく必要があるだろう。自分の肥やしになるものは、脳が自発的に躍動し始める類のものであり、決して脳が拒絶反応を示す類のものではないはずである。

今日も少しばかり論文を読んでいくが、その際には、情報を得ようとするような態度であってはならないと思う。少なくとも強固な知識体系を作っていくことを意識するべきであり、理想的には叡智の獲得と創出に向けた自覚が必要である。外側のものを自己の内側に溜め込み、それを用いて外側の現象を外側から語ることほどつまらないものはない。また、そうした試みには意義も価値もないのではないかと思う。

外側のものを取り入れることを否定しているわけではない。むしろ、外側のものを取り入れることは自己の成熟過程において不可欠である。なぜなら、私たちは内発的かつ外発的な力の双方によって成熟を遂げていくからである。ただし、成熟の根幹には内側から外側に向かって開いていくという本質があるがゆえに、外側のものを仮に取り入れたとしても、それを内側から開いていく力の阻害

にしてはならない。往々にして、現代人の成長力というものが鈍化しているのは、外側からのものを過剰に取り入れすぎていることに起因しているように思える。

外側からのものを懸命になって取り入れれば取り入れるほど、内発的な発達力が弱体化していく。現代に生きる私たちに求められているのは、内側から自らを開いていく力なのだと思う。この点は自分も肝に銘じようと思う。とにかく内側から外側に向けて形を生み出していくこと。内発的な造形力を高めていくこと。それを日々の生活の中で絶えず意識する。

自己の創造行為に何とも言えない喜びや無尽蔵な活動力が湧き上がってくるというのは、おそらく創造行為というものがこの世界への真の参画を表しているからではないかと思う。言い換えると、創造行為に従事している時の自己は、深く自らと繋がっているのみならず、深くこの世界と繋がっているのだ。

外側からは必要最低限のものだけを取り入れればいい。しかも、それは自分にとって本当に必要なものである必要がある。外側から自己に流入するものを吟味した形で取り入れた上で、あとは徹底的に創造行為に従事していく。それが内側から自己を開いていく道だ。フローニンゲン:2018/4/28(土)07:35

2482. 夢の中の複雑なマンション

昨日は、ほぼ一日中暖房をつけていたように思う。夜は湯たんぽを使って就寝し、今朝もまた暖房をつけている状態で一日の活動を開始させた。春がやってきたと思ったのも束の間であり、肌寒い日がこれからまだ続くようだ。今朝方見ていた夢について少しばかり思い出す。

夢の中で私は、街の中心にある大きなマンションに引っ越すことになっていた。最初私は、この街は欧州のどこかだと思っていたが、気づけば東京都内であった。都心の駅近くにそびえ立つそのマンションは、外観が立派なだけではなく、中にある施設も充実していた。マンションの中には、レストランやスーパー、美容室などを含めて、そこで生活が完結してしまうような充実した施設が入っていた。

さらには、スポーツジムがいくつかの階に存在しており、プールは合計で10個ほど様々な階に存在しているようだった。そのマンションはおよそ35階立てであったから、スポーツジムとプールの数はかなり多いと思う。私は七階あたりに住んでいた。

引越しをした初日、エレベーターが極めて複雑なことに驚いた。端的には、うまくエレベーターを乗り継いでいかなければ、自分の部屋にたどり着けないような構造になっていた。また、設置されているプールはその階によって混み具合が異なるということを聞いていた。それを教えてくれたのは、このマンションのスポーツジムで働いている係員だった。

引越しの初日、私はプールで泳ぐというよりもジャグジーを使って体をほぐしたいと思っていたため、どの階にあるジャグジーを使えばいいかをその係員に尋ねた。「二階のジャグジーは、今の時間帯はたくさんの勤め人が使っているので混んでいます。なので、四階のジャグジーを使うことをお勧めしますよ」と教えてくれた。その教えに従う形で、私は四階に向かおうとした。だが、どのエレベーターも四階に到着するものはなく、エレベーターを使って三階まで行き、そこから三階の奥にある階段を使って四階に向かう必要があるようだった。

正直なところ、このマンションの高さはそれほどでもないのかもしれないが、各階の面積があまりにも広すぎると思っていた。三階に到着した後、私はすぐに迷った。三階にも色々な施設が入っており、それを眺めながら歩くことには退屈はしなかったが、目的の階段に一向に着く気配がなかった。私はあるところで来た道を引き返し、ジャグジーに入ることを諦め、自分の部屋に行くことにした。

ここでもまた、すぐに自分の部屋のある階に行くことはできず、一度一階に行き、そこから自分の部屋がある階に止まるエレベーターに乗る必要があった。一階に到着すると、自分が乗るべきエレベーターが少し離れたところにあると気づいた。そのため、目的のエレベーターに向かうことにした。

すると、右手にカフェがあるのが目に入った。特に喉が渇いているわけでも、お腹が空いているわけでもなかったが、私は引き込まれるようにそのカフェに入った。カフェの店内は落ち着いており、とても良い居心地をそこに感じた。空いているテーブルを探そうとしていると、一つのテーブに三人の男女が何やら真剣に勉強をしている姿が目に入った。一人の女性と二人の男性は、皆一様に三十代後半ぐらいの年齢だった。

© YOHEI KATO 2018

彼らはどうやら英語で経営学、金融、企業法などを学んでいるようだった。このカフェが私を引き込んで行ったのと同じように、彼らの勉強している姿が私を彼らの方に引き込んで行った。彼らに近づいてみると、そこでなされているやり取りが色々と聞こえていた。私は注意深くそれを聞いていた。

しばらくそのカフェで過ごした後、私は自室に戻ろうとして再びエレベーターに向かった。ちょうどカフェから外に出た時に、最初の会社でお世話になっていた二人の女性の上司と遭遇した。

上司A:「あら、偶然。心身の状態は大丈夫？」

私:「本当に偶然ですね。ええ、お陰さまで心身の状態は良好です」

上司A:「それは良かった。ここに引っ越してきたら、また元気に働けそうね」

私:「ええ、そう思います・・・」

二人の上司に遭遇できたことは喜びであったが、どうやら私は心身の状態を崩していたらしく、再び会社で元気に働けるかどうかは正直全く確信が持てなかった。むしろそれは、実現されえぬことだという思いが強く自分の中にあった。事実、私はその時会社を辞める決心をしていたように思う。カフェで偶然出会った上司から逃げるかのように、私は二人に別れの挨拶をし、マンションのエレベーターの方に歩き出した。そこで目が覚めた。フローニンゲン:2018/4/28(土)08:08

No.994:Rhythmical Vibrations of Our Souls

The sky is crystal-clear in the early morning, and I can hear beautiful twitters of birds. Listening to them, I can feel as if my soul vibrates rhythmically. Groningen, 09:07, Tuesday, 5/22/2018

2483. 上昇を希求する夢とデッサンの実践

二羽の鳥が西の空から東の空に向かって飛んで行く姿が目に入った。今日は風もなく、鳥たちにとっては空を飛びやすいだろう。いや果たしてそうなのだろうか。鳥たちにとってはむしろ程よい風があったほうが空を飛びやすいのかもしれない。自己に揺らぎを起こすものが自己を前に進める運動に不可欠だということを思い出す。

先ほど、今朝方の夢を振り返っていたが、改めてその夢について考えてみると、いくつかの気づきが生まれた。その中でも特に、目が覚める直前に、私が会社を退職する決意をし、エレベーターに向かった姿が印象に残っている。

会社の上司に遭遇したのは一階であり、自分が向かおうとしていたのは七階あたりであった。両者の間に存在する階層の違いに私は注目をしていた。一階のカフェで上司と話をした時、引き続き会社で働くことは一階に留まり続けることを意味しているように思えた。また、どうやら夢の中の私は、そうした「一階」で働くことによって心身の状態を崩していたようなのだ。

そのため私は、引き続き会社で働くこと、すなわち一階に留まり続けることに躊躇していたのだと思う。「また元気に働けそうね」という上司の言葉に対しても違和感を覚えたが、その言葉に対して自分が発した「ええ、そう思います・・・」という言葉にも大きな違和感があった。実際に、その言葉が出てくるまでに一瞬空白があり、それを言い終えた後もなんとも言えない間があった。一方で、注目に値するのは、そこで私は上司に別れを告げ、元々の目的地に向かって歩みを進めたことだった。

一階に留まるのではなく、私はさらに上の階に向かって進んでいくために新たな一歩を踏み出していた。そうした姿を眺めてみると、この夢は上昇を希求する夢だと述べていいかもしれない。こうした夢は過去にも何度か見ている。今いる場所に留まるのではなく、高みに向かって歩き始める夢の一つとして今朝の夢があるように思える。

夢の中の私が心身の状態を崩していたことが示唆しているのは、もしかしたらどこかに留まり続けることは私にとって望ましくないことなのかもしれないということだった。留まり続けることは心身の状態を崩すことにつながり、心身の状態を良好なものに保ち、さらに心身を育んでいくためには、そこに留まり続けていてはならないのである。そんなことを自分に教えてくれる夢だった。

この夢を見て起床してからすぐに、私はデッサンを行った。昨夜突如として新たな習慣にしようと思ったデッサンを今朝行ったのである。このデッサンは、肉眼で捉えられたものを描くのではない。そうではなくて、心眼や魂眼で捉えられたものだけを描くことに主眼を当てている。

© YOHEI KATO 2018

起床直後の特殊な意識状態の中で、私は数分間ほどデッサンを行った。昨夜にも気づいたが、描かれるものは大抵抽象的なシンボルだ。そのシンボルが何を意味しているのか私にも分からないことがある。

だが、そうしたシンボルが自分の意思空間の中に浮かび上がってきたのであるから、きっとそれは何か意味を持っているのだろう。また、そうしたものが実際に浮かび上がり、鉛筆で実際に描かれたことから、それはリアルなものだとも言える。

デッサンを行う意味や意義に関しては、これからこの習慣を継続させていくことによって徐々に明らかになっていくだろう。自分の中には、眠っている感覚や感性というものが無数に存在しており、それを開いていく試みの一つとしてデッサンの実践が生まれたのだと今は思う。フローニンゲン:2018/4/28(土)08:31

No.995:Serene Sunrise

The sunrise with a reddish purple color in this season is astonishingly beautiful. Today began when I entered the sunrise and came out from its center. Groningen, 09:19, Wednesday, 5/23/2018

2484. 静謐な感覚を通じて

静謐な感覚が自分の中に流れている。空は曇っているのに、どこかそうした曇り空でさえも歓迎するかのように小鳥たちが高らかな歌声を奏でている。

先ほど、知人の方と二時間ほど対話をする機会に恵まれた。二時間の対話を終えた時、その余韻を味わっていたいという感覚に包まれていた。深く静かな余韻が小川の水のように流れていく。その流れをまっすぐに見つめ、その流れの中にただありたかったという感覚がそこにあった。

先ほどの対話を通じて気付かされたこと、学んだことを挙げれば切りがない。そうしたものを列挙することにはほとんど意味はなく、そうしたものを自己の中で温め続けていくことが大切になる。あるいは、得られた気づきや学びの中で、今この瞬間に形として残しておくべき強い必然性を伴ったものだけを書き留めておくことが重要だ。

私たち人間はどうしてこれほどまでに多様なのだろうか。一人の人間に宿る固有の人生。そして、一人の人間が辿る固有の人生に対して大きな畏怖の念を覚える。また、それ以上に驚かされるのは、これほどまでに多様な人生が時として折重なり、二人の異なる人間の人生が共鳴し合うということだ。今日の対話の中でそのようなことが起こった。

哲学者のヨルゲン・ハーバマスは、コミュニケート(comminicate)することの重要性を説いている。人間が行うこの営みに付されている接頭辞「co-」は、「共に」という意味を持つ。真のコミュニケーションとは、全く異なる人生を歩む異なる人間が、共に人生のある時間を共有し、共に歩いていくことを意味しているのかもしれない。先ほど共有されていた時間、そしてその時間の中に流れていたあの感覚を私は忘れることができない。

そうした直接経験が、私にまた何か大切なことを教えてくれる。人間として生きることの真相が少しずつ見えてくるかのようだ。一人の人間が固有の人生を生き、他者と共に生きていくことの真相が少しずつ明らかになっていく。二人の異なる人間が持つ固有の人生が共鳴するという現象は、一体何を示唆しているのだろうか。

雨がポツポツと降り始めたかと思ったら、その勢いが突然増してきた。この激しい雨にあっても流れさえぬもの。それこそが、人の人生が互いに共鳴し合うということの真の意味なのかもしれない。

互いに異なる人間の人生が共鳴し、折り重なりうるというのは絶対に揺るがない一つの真理なのではないだろうか。それを先ほど間違いなく経験していたことが、その不動さを物語る。もしかすると、ここに自分の活動の立脚点と希望を見出すことができるかもしれない。一人の人間が真に生きたという物語は、他の人間の物語と共鳴しうるということ。その気づきがまた先ほどの対話の余韻を深く静かなものにしていく。フローニンゲン:2018/4/28(土)12:13

No.996:In a Mysterious Dream

I had a mysterious dream last night. Since I wrote it down, I've been in an altered state of consciousness. I'll gradually start today's activities. Groningen, 09:54, Thursday, 5/24/2018

2485. この剥き出しの直接感覚

雨に濡れた通りを走る車の音が聞こえて来る。先ほどの激しい雨は、しとしとと降り注ぐ雨に姿を変えた。二人の女性が異なる原色の傘を差しながら道を歩いて行く姿が見えた。昼食前に行っていた知人の方との対話を今また思い出している。

真の対話には深く静かな感覚が伴い、真実なもの、善なるもの、美なるものの根幹にはこうした静謐な感覚が横たわっているような気がしてならない。真善美には、静と動を超えた絶対的な静けさがある。その絶対的な静けさは絶対的な動も表す。そんな感覚に触れていたのが先ほどの時間であった。

それにしても、フローニンゲンの天気は元気がいい。ここまで目まぐるしく天候を変えれるほどの生命力には思わず唸ってしまう。静かな雨が降っていたかと思いきや、今は少し晴れ間が顔を覗かせ、太陽の光がフローニンゲンの街に降り注いでいる。

今日の対話を通じて、一昨日か昨日に考えていた真善美の関係性が自分の中でより明瞭なものになった。それらの領域はどれも重要な価値を帯びているが、美的領域の絶対的な重要性について考えを巡らせていたのが一昨日または昨日のことだった。

美の遍満性について考える。美は真と善の領域を支える基礎として存在しているのと同時に、それらの領域を超越する形で、あるいは究極的な真と善のその先にさらに美的な次元が広がっている。そんな考えが芽生えていた矢先、今日の対話の機会があった。知人の方と対話を積み重ねながら、その考え方があながち間違いではなく、現時点において一つの確信を自分にもたらしたかのようだった。

科学と哲学の探究はこれからの自分にとって不可欠のものになる。一方で、芸術の探究はさらにその重要性を増すだろう。

今日の対話の中で、自己の存在をかけて語るべきものが何であり、それを表現する方法にはどのようなものがあるのか、についての話題が取り上げられた。これは私が何年も向き合っていたテーマである。今もまだそのテーマに向き合っている最中だが、自らの存在をかけて語るべきものとその表

現媒体は、どちらも共に内側から育まれていくものだと思う。つまり、語るべきものも表現形式も外側に求めてはならず、どちらも自らの成熟の歩みと歩調を合わせるかのように造形されていくものなのだ。

自己という固有の存在が形としてこの世に共有していくテーマそのものが固有であり、その固有性ゆえに、それを表現する手段も固有のものでありうる。むしろ、固有のものは固有な形で外側に表現されると述べた方が正確かもしれない。

今日の対話を通じて、改めて私は東洋思想を深く学びたいと思った。これも何かの偶然だろうか、一昨日に井筒俊彦先生の“Toward Philosophy of Zen Buddhism (1982)”という書籍を本棚から引っ張り出し、「これをもう一度読む必要がある」と気付かされたのである。

自己に付着する様々な囚われから解放され、水の如く生きることの道を自己の体験を通じて深く探求していきたい。「あるがままに生きる」という虚飾にまみれた世間の言葉に耳を傾けるのではなく、自らの体験を通じて、あるがままに生きるとはなんたるかを掴み、それを通じて生きて行く。

太陽のように、風のように生きること。今この瞬間に目に映る裸の街路樹のように、赤レンガのように生きること。

今この瞬間を生きているというこの直接的な剥き出しの感覚に触れながら生きていくことが、あるがままに生きるということの重要な側面なのではないかと思う。フローニンゲン：2018/4/28（土）13:12

2486. 世界と共に生きるということ

中欧旅行を境に、私は十数年ぶりにニュースを見るようになった。中欧旅行の最中にCNNのニュースを見たとき、そこで英米仏によるシリア攻撃の出来事を目撃した。それ以降、自分の中の何かが動き出し、この世界の現実を直視しようという思いが湧き上がった。「ニュースを見て世界で起こっていることを知る」というのは馬鹿げたことである。それこそをこの十数年避けてきた。この現実世界で起こっていることを知るというのはで何も始まらない。知ることを超え、この現実世界に自分なりの方法で関与するためにニュースを毎日少しばかり見るようにした。

雨が上がり、夕方のフローニンゲンの街に穏やかな雰囲気が戻ってきた。小鳥たちが小刻みなリズムで鳴き声を奏でている。手前の空にはまだ雨雲がうっすらとかかっているが、遠い空は夕日で照らされ始めている。

この世界は何も変わらないかもしれない。少なくとも、私たちが思っているよりもずっとこの世界はゆっくりと進化の方向に向かっている。確かに、表面的な変化は激しく見えるかもしれない。だが、そうした変化を超えた本質的な世界の変容は、私たちが想像しているよりもずっとゆったりとした速度で成し遂げられていく。

仮にこの世界が何も変わらなかったとしても、この世界に関与していく。一人の人間がこの世界を変えることができるという発想は幻想であり、自己肥大化の最たる例である。だが、それを分かった上で自分にできることを行っていく。それこそが人間としてこの世界で生きていくことではなかったか。それをしないことは、社会的な生き物である人間として生きることを放棄することにつながりはしないだろうか。

中欧旅行で見たことや感じたことを思い出す。それらを一言で述べれば、人々が固有の生を生きているということだった、と要約できるかもしれない。

「生きているということがそこにある」という確かな感覚。それを私はワルシャワとブダペストの街で感じていた。一人一人の人間が固有の生を確かに生きているという事実。一人一人の人間が自分の仕事を持ち、その人なりの関与をこの世界に対して行っているということ。そうした人々の姿を見たとき、わずかばかりの希望の光が自分に差し込んできた。

一人の人間として生きることを放棄しないこと。すなわち、この世界と関わりながら日々を生きていくということをあきらめないこと。最後の日まで人間として生きたいと思う強い気持ち。そうした思いだけが自分の内側にあるのではなく、それはもう行動として、形として外側に滲み出し始めている。溢れるものを止めることはできない。

先ほど、CNNのニュースでアフリカ人の医師が取り上げられていた。彼は医師としての仕事のみならず、ミュージシャンであり、かつ絵本を製作することを自らの仕事としていた。彼のインタビューを

聞いていると、それらの三つの異なる活動が一つの統一的な営みに思えてくる。事実、彼もそれを示唆するようなことを述べていた。

この世界への関与の仕方は無数にある。共通しているのは、絶え間ない創造の流れを持つこの世界に対して、自らの方法で創造を通じた形でこの世界に関わっていくことだ。一人一人の固有の生があるというのは、一人一人の固有の創造行為があるということだ。なぜなら、生きるということは本質的に創造的な特質を持っているのだから。また、私たちは創造を運命付けられた生き物なのだから。フローニンゲン:2018/4/28(土)17:10

2487. 学会とギフトショップに行く夢

霧のような雲が空を覆い、小鳥の声だけがどこからともなく聞こえてくる早朝。今朝は六時前に起床し、六時を少し過ぎた時間から一日の活動を開始した。

今朝は薄い雲が空を覆っているためか、今日のこの時間帯はまだ薄暗い。また今日は日曜日であるためか、いつもより辺りが静まり返っているように思える。風もなく、静止画のような風景が窓の外に広がっている。

今朝方見ていた夢について少しばかり書き留めておきたい。夢の中で私は、ヨーロッパのどこかの街で行われた学会に参加していた。その学会のテーマは人間発達であり、世界中の研究者がこの学会に集まった。ただし、この学会の規模はそれほど大きくなく、そこに集まった人数も驚くほどの多さではない。

多すぎず、少なすぎずの研究者たちがこの学会に参加していた。私はあるセッションに参加するために一つの部屋に入った。すると、そこでは数年前にお世話になっていたレクティカのセオ・ドーソン博士とザック・スタイン博士が発表を行っていた。彼らの発表は私が聞きたいと思っていたものではなく、どうやら部屋を間違えたようだった。

部屋の中に何歩か足を踏み入れてしまったため、ドーソン博士が私に気づき、壇上から私に声をかけてきた。そして、発表を最初から聞いていない私に対して、「この発表に関して何か質問はあるか？」と尋ねてきた。一瞬私は戸惑ったが、ドーソン博士の隣にいたスタイン博士に二、三質問しよ

うと思った。ただし、あまりにも急な振りであったため、質問を練る時間がなく、とりあえず話に出ていた二つの概念の内容をもう一度説明してもらうことにした。

それが一つ目の質問事項だった。私の質問に対して、スタイン博士がすぐさま回答を始めた。しかし、私の位置からは彼の声が聞き取りづらく、回答の最後の最後で急に声が大きく聞こえ始めた。また不思議なことに、その場での質問と回答は当然ながら英語でなされていたのだが、スタイン博士が回答を終える直前に、「以上です」と日本語を述べた。私はスタイン博士に一目置いており、いつも彼からは大きな刺激を受ける。その分、回答がほとんど聞こえないのは残念であった。そうした残念さと共に、日本語が話せないはずのスタイン博士がなぜ最後の最後で流暢な日本語を話したのかが不思議であった。

スタイン博士とのやり取りを終えると、私はその部屋を出た。さらには会場からも離れ、街中に向かった。すると、その場所がどうやらブダペストのような様相を帯びていることに気づいた。偶然にも街の中心部で大聖堂を見つけた。その大聖堂には息を呑むものがあり、私は少しばかりその場にたたずんでいた。

街の中心部に足を運んだのはこの大聖堂を見るためではなく、近くの美術館のギフトショップでお土産を買うためだった。昨日その美術館に訪れた際に、購入しようかと迷った品があり、結局それを購入せず、今日改めてそれを購入したいと思っていた。

美術館に到着したのはいいものの、ギフトショップに入るためだけに入場チケットを購入することはためらわれた。何か方法はないかと考えていたところ、その場にいた二人の日本人観光客から、「昨日に購入したチケットをまだ持っていれば、中に入れるかもしれません」と教えてもらった。幸運にもまだ昨日のチケットがあったため、私はそれを持って無事に中に入ることができた。ギフトショップで目星の品を見つけ、それを持ってレジに向かった。

レジの係員は若い日本人女性であり、私はカードで支払うときに昨日の入場チケットを見せた。実は先ほど館内に入ったときには、このチケットを誰にも見せずに中に入ることができたため、ギフトショップのレジでこのチケットを見せることに一瞬不安があった。だが、私は無事に見当のお土産を購入することができた。そこで突然目が覚めた。フローニンゲン：2018/4/29（日）06:40

© YOHEI KATO 2018

2488. 今日と明日以降の取り組み

昨日はいつもより10分ほど早く就寝をしたのだが、このわずか10分という時間の差によって、今朝はここ数日よりも早く目を覚ました。また、起床直後の調子も良いように感じた。就寝時間を少し早くするだけでも随分と生活のリズムが変わることを改めて実感する。確かに、これまでも早寝早起きだったが、とにかく夜は早く寝るようにしたい。特に、自分の脳があまりよく働かなくなってきたと思ったらすぐに休むようにする。そうしたことを心がけたい。

今日は午前中に二つのことに取り組む。それらはどちらも協働プロジェクトに関するものである。内容は異なれど、報告用のレポートを作成するという点では同じである。これら二つのレポートの提出日は少し先であるため、一度全体のドラフトを作成し、少しばかり文章を寝かせておきたい。

午後からは、午前中とは異なる仕事に着手していく。一つは、協働先の企業から依頼を受けた寄稿文を執筆していくことである。このドラフトは数日前にすでに完成しており、午後からもう一度全体を読み返し、必要な箇所に修正を施す。修正が無事に終わったら、早速それを先方に送りたい。午後から取り組む二つ目としては、研究インターンの最終レポートを完成させることだ。こちらに関してもすでにドラフトが出来上がっており、あとは最終稿にするだけだ。

ちょうど先週の水曜日に、インターンのコーディネーターとミーティングを行い、その時にこのレポートの提出期限について聞いた。特に明確な期限はなく、こちらの都合の良い時にそれを提出できることが分かった。すでにドラフトができているのであるから、その提出を長引かせる必要性をほとんど感じておらず、今日中にこのレポートを完成させ、提出まで行っておきたいと思う。結局、今日は四つの異なる文章を執筆していくことになる。

日本語のものが三つ、英語のものが一つと、言語の偏りはあるが、こうした形で文章を執筆することに絶えず従事することができている喜びを感じる。おそらく今日は、この四つの文章を執筆することで手一杯になるだろうが、仮に時間が余っていれば、過去の日記を編集したい。

そして明日は、研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授とのミーティングの前に、現在取り掛かっている論文の“Results”のセクションの内容を拡充させたいと思う。明後日以降から“Discussion”のセクションの執筆に取り掛かり、来週末からは明日のミーティングで受けるであろうフィードバックを

元に、これまでの文章に修正を施していく。今日、および明日以降はそのような形でなすべきことを前に進めていく。フローニンゲン:2018/4/29(日)06:59

2489.「絵画を聴き、音楽を描くこと」に向けて

今朝も相変わらず気温が低い。昨日と同様に、一日中暖房をつけっぱなしにしている。

外の景色を眺め見ると、薄い雲が空一面を覆っていることに変わりはないが、太陽の光が地上になんとか届いている。自分の内側を眺めてみると、小さな炎が揺らめきながらその強さを増しているのが分かる。強さの増大は微々たるものが、炎が力強いものに向かっている。内面の炎の色が深く濃いものになっていく。

昨日ふと、自分の中の全ての事柄がまた新しく始まろうとしていることに気づいた。そうした始まりに対して、私は期待のようなものを持っているようだ。静かに高まっていく期待が自分の内側で脈打っている様子を見てとることができる。脈打っている何か。

内面の炎にせよ、そうした期待にせよ、それらは全て揺らめきながら脈動する性質を持っている。脈動と躍動はここに一致するのかもしれない。自分の内側の中で絶えず脈動するもの、そしてそれが躍動する形でどこか遥か彼方の世界に向かっていく。そんな姿を毎日、毎日、毎日見つけることができる。そうした姿を見守ろう。そんなことを思った。

数日前から心眼や魂眼で捉えられた現象をデッサンすることを始めた。これは今の私にとって、いやこれからの私にとって不可欠な実践のようだ。この実践を取り入れたことによって、私の中で何かがまた違う次元に向かって動き出しているのが分かる。今はシャープペンシルでデッサンをしているが、もしかしたら近日中に近くの文房具屋に立ち寄り、数多くの色が揃った色鉛筆のセットを購入するかもしれない。

黒単色の方がいいのか、色鉛筆を用いた方がいいのか、その辺りの判断は少しばかり先延ばしにする。デッサンの実践が新たに加わったことにより、これまで用いていなかった感覚が開いていくかのようである。以前から、曲を絵画として表現することや、その逆として絵画を曲として表現できない

かと考えていた。それができれば、どれだけ日々の創造活動が充実したものになり、毎日の精神生活がどれだけ豊かになるだろうかと思っていた。

もしかしたら、今の私は本当にその実現に向けて歩み始めたのかもしれない。これまでこの世界に存在するいくつもの美術館を訪れたが、そこで見た絵画作品から感じられたものを曲として形にしたいという思いが度々あった。また、日々傑出した音楽を聴く中で、それを絵画として表現できたらどれだけ素晴らしいかと思っていた。

そのようなことを考えていると、いつも朝食のリンゴを食べながら眺めている、ニッサン・インゲル先生の作品について思い出した。インゲル先生は、「絵画を聴き、音楽を描くこと」を信条にしておられた。改めて先生の作品を眺めた時、その信条が作品の中に宿っていることが明白なものとして知覚された。

作曲をしている最中、そしてデッサンに没頭している最中のあの観想的な意識の状態。人間が行う創造行為の中には本当に不思議な現象が無数に存在している。今日も一日中観想的な意識状態の中で充実した一日を過ごすだろう。なぜなら、私は一瞬たりとも創造行為から離れることなく生きているからだ。フローニンゲン:2018/4/29(日)08:36

2490. コンポジションセラピーの可能性

天気の変動に思いを馳せていると、自己が変容するに応じて自身の関心領域が変わっていくのは当然のことだという思いが湧き出てきた。仮に自らの内面が広く深いものに向かっているのであれば、関心の対象領域が拡張し、それが徐々に深まっていくのは当然である。

今の私は、芸術と人間発達に強い関心がある。とりわけ、芸術の領域の中でも音楽に関心があり、より厳密には、作曲という創造的な営みの中にある諸々の発達現象と作曲を通じた人間発達に関心がある。楽曲を聴くことによって得られる直接体験と作曲を通じて得られる直接体験。そうした体験の深まりについても探究をしていきたい。

早朝から空を覆っていた薄い雲がさらに薄くなっていき、ほのかな太陽光がフローニンゲンの街に降り注いでいる。書斎の窓から外を眺めると、道端の花を摘んでいる夫妻の姿を見かけた。

この生涯をかけた探究に関して、今は本当に種を蒔くことに専念したい。撒いた種から芽がなり、花が咲くのはずっと後だ。そしてそれは、ずっと後になってからでいいのである。実った実を収穫するのはもっとずっと後でいい。もしかすると、そうした実を収穫するのは自分でなくていいのではないかとすら思えてくる。とにかく今の私にできることは種を蒔き、一つ一つの種を愛情と情熱を持って育てていくことだけだ。

今日は午後から雨が降る予定になっている。早朝に、色鉛筆を使ってデッサンをしていこうと思い立った。そこからまた衝動的に、今日近くの文房具屋に行って早速色鉛筆を購入しようと思った。

欧州での三年目の生活は、これまでの二年間以上に旅に出かけることが多くなるだろう。来月と再来月は学会に参加することのついでに旅に出る。それ以降もほぼ毎月に一回はどこかの地に旅に出かけることになりそうだ。これからの旅では、常に楽譜と色鉛筆を持参する。旅先では日記を執筆するだけではなく、それに合わせて作曲を行い、デッサンを行っていく。

日記、作曲、デッサンは三位一体だったのだ。この重要なことに今気づいた。

デッサンをしている最中に気づいたが、それは作曲と同様に治癒的かつ変容的な作用を持っているということだ。確かにアートセラピーというものが存在しているように、絵を描くことにはそうした作用があるのかもしれない。この点については、これからの体験を通じてより深めていきたいと思う。もしかしたらアートセラピーの範疇なのかもしれないが、作曲実践が持つ治癒的かつ変容的な効能に着目した「コンポジションセラピー」というものが世の中には存在していないのではないかとふと思った。

作曲を始める前に私自身も思っていたことだが、作曲という実践はどこか難解な営みであり、音楽の才能に恵まれた一部の人にしかできない営みだと思われがちである。しかし私には、全ての人が何かしらのアーティストであるという確かな考えが芽生えてきており、とりわけ音楽というのは全ての人の中に固有のものが眠っているように思えて仕方ない。

人は絶えず意味を生成しながら、同時にその意味には固有の音が付随しているように思えてくるのである。そうした音を外側に表現する形で、治癒や変容が起こりうる可能性というものを見出しつつある。

© YOHEI KATO 2018

ヴィクトール・フランクルが提唱したロゴセラピーの要諦には、人生の中に新たな意味を見出し、人生に付与していた既存の意味を変容させていくことが存在している。自分の内側に新たな意味を見出すことに付随して、自分の内側に新たな音を見出していくというのはどうだろうか。そうした新たな意味と音が相まって、治癒と変容が起こりうる可能性を作曲実践は秘めているように思えてならない。フローニンゲン:2018/4/29(日)10:16

2491. 儚さを超えた永遠の関与

時刻は夜の八時を迎えた。今日は午後に少しばかり小雨が降ったが、今はすっかり雨が上がっている。わずかばかり風が吹いており、辺りはまだ明るい。

今日を振り返ってみると、本当に充実した日曜日だったと言える。予定していたように、四つの文章を全て完成させた。午前中に、協働プロジェクトに関する一つの資料と寄稿文を完成させ、午後からはまた別の資料を一つ作成した。それが終わった後にバッハの曲に範を求めて曲を一つほど作った。

作曲実践のおかげで普段は活性化させない感性が刺激され、独特の集中力と抽象記号操作の能力が養われているのを感じる。その後、研究インターンのレポートに加筆修正を行い、先ほど無事にコーディネーターに提出した。

早朝に予定した通りの仕事を進めることができて、今は非常に満足している。そうした満足感と同時に、充実感が自分の内側に流れ込んでくる。今日はほとんどインプットの時間を取っていないが、それでいい。この世界に形を生み出していく創造行為が一日のうちの九割を占めるのがちょうど良い。

そうした創造行為に従事する形で知らず知らず私は多くのことを学んでいる。そのため、外側から何かを意識的に取り入れようとすることは最小限でいい。専門書や論文を読むことの重要性は計り知れないが、同時にそれは取るに足らないことである。最も重要なことは、自分の内側にあるものを形としてこの世界に残していくということ。その考え方に見事に沿うことができたのが今日という一日だった。明日も同様の一日としたい。

昨日知人の方との対話を通じて感じていた静謐感を思い出す。対話後の余韻がまだ自分の内側に残っているかのようだ。あの時間はそれほど大切なものだったのだ。

この世界で生きていくということ、そしてこの世界に関与をしていくことの儚さをどのように超えていくか。この主題は以前の私が持っていたものだ。今の私は、そうした儚さを超えた形で日々を歩み始めているように思う。肉体が滅びても存続し続けるものを掴むことができ始めていること。それが日々の歩みを根底から支えている。

肉体のみならず、自己が消滅したとしても存続し続ける存在の残り香に気づくだろうか。それは単なる残り香ではない。ありありと、そして生き生きとそこに躍動するものだ。それは一人の人間が残した仕事に宿っている。形として残したものの中に宿っている。ここでいう形とは言うまでもなく、具体的な事物のみを指さない。精神的なものも立派な形としてこの世界にある。

今書斎の中に流れているバッハの音楽に耳を澄ましてみる。流れてくるこの音の中に今もなお生きているバッハの存在の残り香を感じることができる。バッハはまだこの世界の縁起に関与しているのだ。残した楽曲によって、これからもバッハはこの世界の縁起に関与し続けるのだろう。

これは何もバッハだけが成しえたことではない。私たち一人一人がそれを成しえるし、それを成していくことがこの世界に関与していくことではないだろうか。それが成しえたとき、私たちは一体何に儚さを感じることがあるだろうか。そこにはもう永遠の関与が誕生しているのに。フローニンゲン:2018/4/29(日)20:14

2492. 帰るべき場所に向かう夢

今朝方は本当に激しい雷雨に見舞われた。フローニンゲンに住む全ての人が目を覚ましてしまうのでははないかと思われるほどに激しい雷が鳴り、激しい雨が降り始めた。ちょうど私の家の近くに雷が落ちたようであり、その音は途轍もない轟音であった。早朝未明の二時あたりに一度目を覚まし、四時にももう一度目を覚ました。四時を迎えた時に雷と雨の音が最も激しかったように思える。私は体を起こし、窓を通じて外の様子を眺めていた。断続的に空が雷の青白い光に包まれている。そして、激しい雨が地上に降り続けている。そんな状態がしばらく続いた。

早朝の六時半を迎えた今は雨も上がり、今朝方未明の天候が嘘のようである。ただし、昨日よりも強い風が吹いており、それは激しい雷と雨の名残であるかのようだ。

今朝方の一件は何を暗示しているのだろうか。もしくは、どのような意味をそこから汲み取ることができるだろうか。私には、激しい雷が地上の何かを打ち壊し、激しい雨が地上を洗い流すかのように思えた。そんな早朝に見ていた夢の内容について思い出す。

夢の中で私は、実際に自分が通っていた中学校の体育館の中にいた。そこでは別段運動をしていたわけではなく、集会か何かに参加していたようだった。そこに集まっていたのは、おそらく当時の旧友たちだろう。当時お世話になった体育教師と私たちは、自分たちの進路について話していた。

先生は一人一人の生徒と二、三言葉を交わし、彼らの進路の幸運を祈っているようだった。そこで私にも進路に関する同様の質問が投げかけられた。

体育教師:「加藤はこれからの進路はどうする？卒業まで三ヶ月あるが、その後はどこに行くつもりなんだ？」

私:「・・・帰る場所。・・・帰る場所がないんです・・・」

先生の質問に対して私は一瞬躊躇し、出てきた言葉は「帰る場所がない」というものだった。私はそれを涙を流しながら小さく呟いていた。

体育教師:「帰る場所がない？そんなことはない。帰るべき場所はたくさんある。ほら、ここもそうだろう？」

先生は、自らの帰るべき場所がないことを涙ながら語った私に近づいてきて、慰めと励ましの言葉を与えてくれた。先生はさらに言葉を続けた。

体育教師:「例えば、市内に新設される図書館のマネージャーになるというのはどうだ？図書館の設立条件に見合うだけの十分な本を集めることができたそうだ。その図書館で働くというのはどうだろう？」

そのような申し出をしてくれた。帰る場所がないことに対して途方に暮れていた私は、その申し出を有り難く思った。一瞬その仕事が魅力的に思えた。図書館をマネジメントしたことはないが、マネジメントの仕事に従事するだけではなく、毎日書籍に囲まれた生活が送れるだろうという期待が私の中にあった。

しかし私は、その申し出を受けることなく、どこにも帰らずに前に進む決心をした。「帰る場所がないのであれば、前に進もう。前に進めば、帰るべき場所があったことにきっと気づくはずだ」そんな思いが現れた瞬間に、夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私はどこかの小高い山の山道を走っていた。その道は整備されたものではなく、文字通り獣道だった。山の頂上まで走り、そこから山の麓に帰ってくるようなレースに参加しているようだった。私はそのレースの首位を走っていたが、後ろから自分よりも早い人たちが何人か迫ってくる気配を感じていた。

後ろを振り返ってみると、そこには誰もいない。だが、確かに後ろから誰かが追いかけてくるのを感じていた。そこで私は、獣道の中でも最も過酷な道を走るようにした。なぜなら、単なる獣道よりも、いばら道こそが最も早く目的地に辿り着けると思ったからである。

山の頂上に到着し、そこから山の麓に下りていく時、私は道を走るというよりも、道から滑り落ちる形で麓に向かっていくことにした。滑り落ちる速度は早く、足元に何があるのか見えない恐怖感があった。特に、毒蛇や毒を持った虫がそこにいるのではないかという恐怖があったが、私は山の麓まで一気に滑り落ちて行った。

するとそこでまた夢の場面が変わり、私は大学のような建物の中の大教室にいた。そこで私は、統計学に関する資格が授与される式に参加していた。私の名前が呼ばれ、教室の壇上に向かうと、資格証明書を渡すフランス人の女性教授が一つ私に質問をしてきた。

それは、この資格は上級資格の方かどうかを確認するものだった。どうやら一般資格と上級資格の二つがあるらしく、私は自分が履修したコースが上級資格の取得に合致したものであるならば、上級資格の発行をお願いしたいと申し出た。するとそのフランス人の女性教授は、資格証を管理して

© YOHEI KATO 2018

いるもう一人の男性教授に私の申し出の可否を訪ねていた。すぐさまその女性教授は私に資格証らしきものを渡した。

その文言を確認すると、全てフランス語で書かれており、上級資格を取得できたのか否かがすぐには分からなかった。一瞬不合格になったのかと思ったが、推測できる文字の内容とその語感から、どうやら無事に上級資格を取得できたのかもしれないと思った。そこで夢から覚めた。フローニンゲン:2018/4/30(月)07:08

2493. 弁証法的発達プロセス:帰るべき場所に向かって

たった今、一日分のコーヒーを作った。あくまでも作っただけであり、まだコーヒーを飲む時間ではない。いつもの時間帯からコーヒーを飲み始めることにする。コーヒーマシーンの音とそれが引き立てるコーヒーの香りに意識を向けていると、先ほどの夢の内容について改めて考えていた。「帰るべき場所がない」と涙ながらに語った夢の中の自分に対して、ここにいる私は驚いている。

突然そのようなことを呟いたあの自分。帰るべき場所がないということを無意識の深層的な自己が思っているのであれば、それは私にとって重大な意味があるように思える。無意識の中に現れた深層的な自分についてもう少し考えてみる必要がある。確かに私は、「帰るべき場所がない」と何かを訴えるかのように小さく叫んだ。それに対して、夢の中で現れた体育教師は「そんなことはない」と声をかけてきた。

よくよく考えてみれば、この体育教師の存在も無意識の深層的な自己の一側面が表れたものだろう。そうであれば、私の無意識の中にいる自己は、帰るべき場所がないと思っているの同時に、帰るべき場所はあると思っているようなのだ。つまり、私の深層的な自己はこの板挟みを経験しているようなのだ。それに対して、この私はどのように思うか。おそらくこの私は、夢の中で「帰るべき場所がない」と述べた自分の姿をした自分と同様の考えを持っているのと同時に、夢の最後で一つの決心に達したあの決心を持っているように思う。

人が内面を深めていく過程というのは、つくづく弁証法的なのだということに気づく。帰るべき場所がないという一つの命題と、帰るべき場所はあるという反命題が私の深層意識の中に生じ、二つの命題を止揚した形で達したあの決意について考えなければならない。あの決意そのものだけでは

なく、決意に至った過程の中に、自己が深まっていく本質を見て取ることができる。また、自分という一人の人間が、確かに弁証法的な形で歩みを進めていることにも気づく。こうしたことに気づいていかなければならない。それに気づくことができるのは自分自身しかいないのだから。

今日も相変わらず肌寒い。ここ数日間暖房をつけっぱなしにしており、今朝も暖房はつけたままだ。欧州での三年目の生活を迎えるに至った流れに思いを馳せる。これは欧州にもう一年だけ滞在することを意味しているのか、それとも私は欧州に捕まったのか。仮に欧州での生活を今年で切り上げたとしても、私は再びこの地に戻ってくるような気がしている。その時はもっとずっと長くこの地で生活を送ることになるだろう。そんな予感がしている。

「帰る場所がない」と嘆いた夢の中の自分についてまた考える。この私は帰る場所があることを知っている。一方で、帰れない諸々の理由があることも知っている。帰るべき場所に帰れない諸々の理由と向き合い、それを乗り越えていくこと。それが今の自分に課せられていることであり、今後数年向き合っていくことなのだと思う。

私はもう帰るべき場所がどこなのかを知っている。ただ、そこに帰れない絶対的な理由がいくつもある。その理由を乗り越えていくためには、本当に前に進むよりしょうがない。成熟への歩みの過酷さがここにある。留まる形では、ましてや退行する形では、その理由は解決されていかないのだ。前に進むことによって、しかもそれは解決を意図して進むのではなく、自分が進んだ結果として自ずからその理由が解決されていくということこそ、人間の成熟過程で見られる本質的な現象だと思う。

遥か彼方の帰るべき場所に向かって、今日も一歩、そのたったの一歩を前に踏み出したい。フローニンゲン:2018/4/30(月)07:32

2494. 考えるべきことに向かって

歩道の水溜りの表面が、風に吹かれて揺らめいている。その様子を眺めると、歩道の水溜りが自分と近しい存在であるかのように思えてくる。同時に、水溜りと吹く風の双方が自分に近しい存在なのだということが分かる。考えてなくてもいいことを考えること。それを強いられるのが国の外で生活をすることの本質にあるような気がしている。

あえて「考えなくてもいいこと」と表現したが、それは当然、「一人の人間として生きていく上で考えるべきこと」を意味している。この現代社会において、考えるべきことが考えなくてもいいことに成り代わってしまっているがゆえに、あえて私はそのように表現した。

一人の人間として生きていく上で考えるべきことを、私はなぜ母国で考えていくことができないのか。おそらく、それは不可能ではない。だが、そこには激しさが一切なく、怠惰な形で考えが進んでいくことが目に見えている。そうした状態を招いているものは何なのか。一つには自己の未熟さ、二つ目には文化的呪縛が挙げられるだろうか。

この問題について考えるときはいつでも、その問題をそれら二つの要因に還元してしまう自分がいる。その他にも要因はないか？仮にその他に要因がなかったとしても、少なくともそれら二つの要因についてはもっと掘り下げていく必要がある。自国の外で考えられることが自国の中で考えられないのはなぜなのだろうか。より厳密には、考えられる・考えられないという二分法的なものではなく、考えの深度に如実な差が出るのはなぜなのかを考えていく必要がある。

一昨日、知人との対話の中で私は、「その土地でしか考えられぬもの、感じられぬものがあり、そしてその土地でしか育まれぬものがある」ということを述べていたことを思い出した。その発言は上記の件と密接な関係があるだろう。今の私が焦点を当てているのはもしかすると、そうしたその土地固有の思考・感覚・育まれるものを超えた形で人間存在と向き合うことの可能性とその方策なのかもしれない。

辺りが不気味な明るさを放ち始めた。空は鬱蒼とした雨雲に覆われており、それでいて雨は降っていない。さらにそれでいて、外の景色が不気味な明るさを持っているように知覚される。

今日は午前中に、まずは過去の日記を少しばかり編集したい。少しずつ着実に編集が進んでいく様子を見て取ることができる。焦らず着実にこの一連の編集作業を完遂させたい。編集作業に目処がたったら、論文の執筆に取り掛かる。ちょうど今日の午後に、研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授とのミーティングがある。

そのミーティングで取り上げる論点を洗い出すことも兼ねて、論文の執筆を前に進めていく。今日は特に、“Results”のセクションの最後の分析に関する文章を執筆していく。それが終われば、あとは

いよいよ“Discussion”のセクションのみとなった。これについては今週末から書き進めていくことにする。ツショル教授とのミーティングに行く前に近所の郵便局に立ち寄り、不在通知と引き換えに荷物を受け取る。

ミーティングの後には、街の中心部の文房具屋に立ち寄り、そこでデッサン用の色鉛筆を購入しようと思う。昨日に、リストとドビュッシーの楽譜を購入したように、着々と日々の探究が前に進んでいるようである。毎日が新たな方向に、そして新たな深みに向かっていくことを実感できている。その感覚は、日々の充実感と幸福感と密接に結びついている。フローニンゲン：2018/4/30（月）07:59

2495. 研究の進展：ツショル教授との久しぶりのミーティングより

今日は雨が降ったり止んだりを繰り返している。今また雨が降り始めてきた。

今日は午後から論文アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授とミーティングを行った。中欧旅行の前に一度ミーティングを行って以来のミーティングとなる。今日はミーティングの開始の前に、中欧旅行に行った際に購入してきたお土産をツショル教授に渡した。ツショル教授が随分と喜んでくれたので何よりである。

今日のミーティングも実に有意義な時間であった。おそらくこれまでのミーティングの中で一番実り多いものだったように思う。その要因は、ツショル教授との前回のミーティングから私の研究が随分と前に進んだことにあるだろう。実際に論文も随分と書き進めており、ディスカッションをする材料が十分にあったことは一つ大きな要因だろう。さらには、お互いにこの研究の内容について理解が深まってきており、項目の多様性のみならず、深いディスカッションが随分となされた。その点を私は一番嬉しく思う。

ツショル教授からは、ここまでの研究の進展について高い評価を得ることができている。今日も多くの肯定的なコメントと共に多くの励ましを受けた。ツショル教授の支援のあり方からは随分と学ぶことが多いことに気づかされる。指導の際のコメントの仕方、指導にかける時間など、どれを取っても自分が学ぶべきことがある。

今日のミーティングで得られた事柄をもとに、また研究を前に進めていきたい。ツショル教授とは昨年に一本ほど査読付き論文を世に送り出すことができ、今回の修士論文についてもそれをもとに査読付き論文を執筆する意思をお互いが持っている。こうしたこともあり、まずはこちらの方でできるだけ質の高い論文を執筆していこうと思う。明日は一日ほど研究から離れようと思うため、明後日からまた集中して研究に取り掛かる。

今日のミーティングで決定した次回に向けてのステップとして、私の分析が最初から深いところに入っていくものであったため、あえてここで表層的な分析を行ってみることになった。具体的には、これまでは三つの時系列データのフラクタル次元の相関係数を算出するところから分析がスタートしていたが、そもそも三つの時系列データの相関係数を算出するところから始めるのはどうかとツショル教授から提案を受けた。

これは私も少しばかり考えていたアイデアだったので、この機会にぜひその分析を行っておきたい。その後、研究対象としているMOOCの一つのレクチャーを具体例として取り出し、その講義のスクリプトである元データと三つの定量化基準によって定量化されたデータのそれぞれを取り出す。

そして、取り出された一つの講義がどのような特徴を持っているのかを改めて観察してみることにした。つまり、定量的なデータだけを見るのではなく、もう一度元データに立ち返ることによって、どのような内容の講義がそこで行われているのかという定性的なデータを眺めてみることにした。

それによって、得られた分析結果のフラクタル次元がどのような意味を持っているのかを、具体的な講義内容を想定しながら考えていくことができるだろう。私は具体的な現象をモデル化し、抽象的な次元で考えることを好む傾向にあるため、ツショル教授からの提言は有り難かった。

もう一度元データに立ち返ることは、実際の具体的な講義に立ち返ることを意味している。このステップを通じて、論文の中の実務的インプリケーションやディスカッションのセクションの記述が厚みを増すだろう。研究が着実に前に進んでいることを本当に嬉しく思う。フローニンゲン：2018/4/30（月）17:36

2496. アムステルダムとロンドンでの学会に向けて

今朝は六時半に起床し、七時前から一日の活動を開始した。昨日の朝方には激しい雷と激しい雨に見舞われたが、今朝は至って静かである。

今日の午後からは少しばかり雨が降るようだが、明日からの天気は良くなる。気温を確認すると、明後日はまた最低気温が0度近くまで冷え込むが、明後日以降は春らしい気温になりそうだ。

気づけば今日から五月を迎えた。気づかないところで一つ一つの物事が静かに進行していく。自分の探究活動の一つ一つが、そして人生そのものが静かに進行していく様子を見て取ることができる。それはどこに向かって進行しているのだろうか。それは今の私には分からないし、知るすべもない。

この人生において本当に大切な場所に向かうことに関して、そこに到着して初めて、そこに向かっていたことが分かるのではないかと思う。「向かっているようで向かっておらず、向かっていないようで向かっている」というのは、まさにそうしたことを指している。言葉で表現すると相矛盾しているかのような感覚の中で私は日々を過ごしている。今朝もそのような感覚が絶えず自分の内側にあることを知る。

先月はワルシャワとブダペストに出かけた。今月末はアムステルダムで行われる学会に参加する。来月末にはロンドンで行われる学会に参加する。どちらも共に学会で自分の研究内容を発表する機会に恵まれた。学会に参加することに合わせて、両都市で足を運ぶべき場所に足を運ぼうと思う。アムステルダムに滞在中には、もう一度ヴァン・ゴッホ美術館に足を運びたい。早いもので以前に訪れたのは三年前だ。

この三年の間に自分の中で何かが進行して行ったのだろうか。ゴッホ美術館への訪問は、私の人生における進行の度合いを確認することを促してくれるだろう。前回の訪問が三年前のことだったということに驚いている。三年前の自分の中のゴッホと今の自分の中のゴッホは随分と異なるはずである。なぜなら、私自身がこの三年間できっと進行を遂げてきたと思うからだ。三年振りの訪問を今から楽しいにしている。

また、もし可能であれば、夜にはアムステルダム市内の教会コンサートに参加したい。滞在期間中にちょうどそうしたコンサートがあるか分からないが、なんとか探し出してみたいと思う。ブダペストの聖イシュトヴァーン大聖堂で聴いたオルガンの音色がどうしても忘れられない。あの崇高な音の大伽藍ともう一度接したいという内側からの要求がある。学会が近づいてきたら、宿泊先の確保と合わせて教会コンサートを調べたいと思う。

来月末のロンドンでの学会に際しても、ロンドン市内に教会コンサートがあればぜひ足を運びたい。また、今回の滞在中に大英博物館にも足を運ぶ。おそらくその他の日は全て学会に缶詰になるだろうから、観光は最小限のものとなるだろう。時間が許せば、ロンドン王立音楽院の博物館、ヘンデル・ヘンドリックス博物館、ヘンデル・ハウス博物館にも足を運びたいと思う。それらの場所に足を運ぶか否か、それ以外の場所にも足を運ぶのかどうかを検討した上で、滞在日数を決めたいと思う。

フローニンゲンからは、アムステルダムもロンドンも近い。アムステルダムまでは電車で二時間半であり、ロンドンへはフローニンゲン空港から一時間ほどで到着できてしまう。先ほど確認したところ、フローニンゲン空港からロンドンの空港へ直行便があり、その価格の安さと所要時間の短さには驚かされた。ロンドンがこれほどまで近くにあるとはこれまで知らなかった。フローニンゲンを午前中に出発すれば、その日の午前のうちから、もしくは昼からロンドン市内を観光できそうだ。こうした点を含め、どちらの学会に関してもまた後日旅程を練りたいと思う。フローニンゲン：2018/5/1（火）07:24

2497. 長い冬の時代の終わりに思うこと

書斎の窓から見える街路樹も随分と緑豊かになってきた。あの長い冬を耐え、今こうして緑に色づいた木々を眺めていると、感慨深い気持ちが自然と湧き上がる。

五月を迎えた今でさえ暖房をつけていることからも、まだ冬の余韻が残っていることがわかるが、緑に色づいた木々は冬の終わりを静かに告げている。それにしても随分と長い冬であった。昨年の十月あたりから冷え込んできたことを考えると、この地においては一年間の半分が冬だと言っても過言ではないかもしれない。だが、こうした長い冬の時間がどれほど自分の人生を深いものにしてくれたか分からない。

辛抱強く日々を生きていくこと、その中に宿る固有の充実感を感じながらこの七ヶ月ほどの冬の時期を過ごしてきた。人生における冬の季節が春への準備の時期であるならば、私はこれ以上にないほどの準備をすることができたように思う。そう考えてみると、なお一層のこと、あの厳粛な冬の時代がどれほど大切だったかを改めて知る。そうした冬をこの地で二回ほど過ごした。今年は三回目を経験することになるだろう。

冬の過酷さに対する怯えや恐怖がまだ自分の内側にあることは確かだ。しかしながら、それらも歳を重ねるごとに変貌を遂げ始めている。怯えや恐怖の感情を持っていようがいまいが、それは今年もまたやってくるのだ。そして、そうした過酷な季節こそが、自己を真に深めてくれることを理解し、そうした季節がやってくることを感謝の念で迎え入れる必要があるだろう。

今から四年前に、ロサンゼルスでお世話になっていた合気道の師から、「北に行くといい」という言葉を頂いたのを偶然のきっかけとして、北欧に近いこの土地で三年ほどの生活を送ることになった。師の言う通り、北の過酷な生活は私を随分と鍛えてくれたように思う。それは単純に心身をより強靭なものに育むことにつながったことを意味しているのではなく、人生そのものが鍛錬され、その深みが増していったように思うのだ。

また数ヶ月後には新たな冬の時期がやってくる。三回目の冬を乗り越えた時、そこにはどのような人生が開けてくるだろうか。きっと今よりも深く充実した日々がそこにあるに違いない。この瞬間の充実感が最上のものであることは間違いないが、それは深まっていくのだ。であれば、この冬を乗り越えた後の日々に感じる充実感が今よりも深いものであると期待しても問題はないだろう。この人生において開かれてくるものに全てを委ねたいと思う。

今日は午前中に過去の日記を少しばかり編集したい。この編集作業も着実に進行している。おそらく論文の提出を終えた六月の中旬からは、より一層この編集作業を進めていくことができるだろう。過去の日記を少しばかり編集したら、現在取り組んでいる研究に関する論文を二本ほど読みたい。それらは共に、非線形ダイナミクスの分析手法に関するものであり、昨年に一度目を通している。改めてそれらの論文を読むことによって、自分が研究で用いている分析手法について理解をより深めたいと思う。

二本の論文を読み終えたら、ブダペストのバルトーク博物館で購入した小冊子を全て読み通したいと思う。この小冊子はバルトークの生涯と彼の作品の背景を理解する上で非常に大切な資料である。昼食後に作曲実践を行い、午後からは少しばかり研究に着手しようと思う。昨日の段階では今日は研究から意図的に離れようと思っていたが、離れたくはないという気持ちの方が勝ってしまっている。

昨日にせっかく研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授とのミーティングがあったので、その流れを受けて今日も研究を少しだけ前に進めたいと思う。研究を二、三時間行った後に時間があれば、森有正先生の日記を読み進めていく。今日はそれらの事柄に従事したいと思う。読み、書き、作るという三位一体の一日を今日も送る。フローニンゲン:2018/5/1(火)07:53

2498.「自分自身であれ」及び内的曼荼羅

早朝に一日分のコーヒーを入れ、今日の一杯目のコーヒーを飲むことにした。空気の入れ替えのため、書斎の窓を開放すると、冷たい空気が流れ込んできた。

今、フローニンゲンの街には雨が降り注いでいる。風も幾分強い。雨に濡れた通りを走る車の音が時折聞こえる。こうした雨と風にもかかわらず、一羽の鳥が私の目の前を飛び去っていった。「雨の日固有の侘び寂びを感じることができている」そんなことをふと思った。雨が鬱蒼としたものではなく、とても静かな感覚質を持ったものとして知覚されている。雨の日は侘び寂びの表れであったか。

外の風が強いためか、窓がひとりでに閉じた。今日から五月を迎えたが、フローニンゲンは相変わらず寒い日が続いている。窓から流れ込んでくる風はとても冷たい。冷たいのだが、その中に新鮮さがある。それが春の風というものだろう。

今朝方、起床してすぐに、「自分自身であれ」という言葉が降ってきた。そうだ、この社会は私たちを私たちでないものにさせようとする働きかけをしてくる。私たちは気づかないうちに、自分自身でないものとしてこの世界を生きるように強いられているのだ。社会は私たちを私たちでない何者かにしようとしてくる。そうした見えない力を乗り越え、常に自分自身であることの大切さに改めて気づく。「自分自身であれ」というのはそういうことだったのか。

今日の起床時は、新たな一日が始まったことに一瞬戸惑ったが、今はもうその戸惑いはない。新たな一日が始まったことに驚いたのは、私がまだこの完全なる全体としての大きな流れの中に生きていないことの示唆なのだろうか。

降りしきる雨を眺めていると、今日という一日がまた始まったことの奇跡に思いを馳せざるをえない。そこに戸惑いを感じる必要はなく、この奇跡の中で奇跡的に生きていくということ。そうした姿勢とあり方を持ちたいものである。

早朝に、いつもの日課である過去に作曲した曲を一曲だけ聴くということを行っていた。厳密には、過去の一曲に対してタイトルを付けたり、コメントを付したりすることを行っていた。数日前にデッサンを始めて以降、曲のタイトルやコメントを付す前に、その曲から喚起される内的感覚及び内的ビジョンをデッサンすることにしている。これはとてもよい習慣だと思う。

日記のみならず、作曲とデッサンによって、自分の意味世界がより豊かに深いものに向かっていくのが分かる。それこそが、日々の充実感と幸福感の深まりを促している。

残念ながら、昨日に色鉛筆を購入することができなかった。今週の金曜日にランニングに出かける予定なので、その時に街の中心部の文房具屋に立ち寄ろうと思う。色鉛筆を購入することができたらデッサンの実践がより充実したものになるに違いない。そしてそれが日々の創造行為をより豊かに充実したものにしてくれる筈である。

デッサンに関してはこれから実践を積み重ねていきたいと思っているが、自分の特性からか、非常に抽象的なシンボルが内面世界に浮かび、それを描いていることが多いことに気づく。これからは少し意識的に、自己から生み出される内的シンボル、とりわけ内的曼荼羅に注目をしたいと思う。

そうした曼荼羅を描くことによって、それ自身がどのように変容を遂げていくのかを観察したいと思う。自分が描く曼荼羅にいつか私は驚かされる日が来ると思う。それは作曲においても同じであり、この一連の日記に対しても同じである。フローニンゲン：2018/5/1（火）09:47

2499. 絵画的なものと音楽的なもの

相変わらず雨が降りしきり、強い風が時折吹いている。先ほど玄関の外に出る必要があり、ふと足元を見てみると、そこには青々とした草花が咲いていた。ほんの数週間前には全くの裸の土しかそこにはなかったのに、いつの間にやらこのような青々とした草花が誕生していたことに驚かされた。とても立派な姿でそこに生きている草花を眺めていると、自分の内側から幾分力強いエネルギーが溢れてくるのがわかった。

日常に潜むこのような光景にも、私は本当に感動を覚える。フローニンゲンの街を包む世界が徐々に生き生きとしたものに変化している。

午前中にふと、この世界には、生きた姿が芸術になっている人たちがいることに気づいた。それは芸術家に留まらず、過去に偉大な仕事を成し遂げてきた人に共通の芸術性だと言えるかもしれない。生きることは芸術的でありうるのだ。また、芸術とは生きることそのものの中に宿り得るのだ、ということに気づかされた。

生きることと芸術の意味がまた少し新たなものとして開かれていく。生、芸術、人間発達という三つの主題については、それらを架橋させる形で探究を深めていきたい。これは常々述べていることだが、あえてここでもう一度強調しておきたいと思う。それらは間違い無く、今後の私にとって無くてはならないテーマになっていくだろう。

午前中に過去の日記を20本ほど編集した。時間が許せば、毎日20本ずつ日記を編集していきたいと思う。過去の日記を読みながら、内的感覚を曲としてのみならず、絵画的に表現し始めたここ数日の自分について考えを巡らせた。すると、私はかねてから足を運ぼうと思っていた、フィレンツェにあるレオナルド・ダ・ヴィンチ博物館を今年の年末年始か来年の春に訪れてみようと思った。

デッサンとダ・ヴィンチの業績が突如として結びつき、今後の旅の計画が一つ露わになった。今朝も自分の作った曲に対してデッサンを行っていると、絵画的なものは音楽的なものを誘発し、音楽的なものは絵画的なものを誘発するという相互関係を見て取った。音楽的なものと絵画的なものは、どこか深い次元で強く結び合っており、互いに影響を与え合っている。そうした深い次元というのがもしかすると、美的領域の本質に当たるものなのかもしれない。

作曲に関しては、いつも自分が想定しない音が生まれることに驚かされるが、それはデッサンにおいても同じである。内的感覚と内的ビジョンをデッサンしてみると、思ってもいなかったようなイメージがノートに姿を現してくる。イメージを描く前、そして描いている最中にも想像できなかったようなものが生み出されてくるプロセスは本当に興味深い。創造プロセスの中には本当に未知な現象が無数に潜んでいる。

そうした現象を一つ一つ解き明かしていくことに従事したい。科学者・哲学者・芸術家としてそれを行うことができたらどれほど幸せだろうか。

デッサンについて考えを巡らせていると、どうも自分の内側に未だ眠り続けている内なる曼荼羅に考えが及ぶ。自分の内側に曼荼羅のようなシンボルが浮かんでは消えていくのが見えることがある。それらのシンボルをなんとか形にしていきたいと思う。それを曲や絵に具現化させたい。この内的曼荼羅をまずは立体的に描く技術を高めたいと思う。

最初は二次元的なものからスタートし、徐々に三次元的なものになっていくだろう。三次元でのデッサンが習熟されて来れば、仮に描かれたものが三次元のものであっても、その中に無限の次元を内包することが可能になるだろう。あるいは、三次元の絵の中に無限の次元を表現することができるだろう。その実現に向けて、毎日小さな実践を積み重ねていく。内側のものは外側に、外側のものは内側に。フローニンゲン：2018/5/1（火）13:45

No.997:A Pastoral Walkway

I’ve walked on various pastoral walkways all over the world. I’m recollecting the memories.
Groningen, 09:46, Friday, 5/25/2018

2500. 成人発達理論の普及に関する危機感

今日は午後から嘘のように晴れ間が広がった。朝はあれだけ雲に覆われていて、雨も風もあったにもかかわらず、今はそれを信じることができないほどに晴天が広がっている。

時刻は夜の八時を迎えつつあるが、夕方の四時のように明るい。今この瞬間のフローニンゲンの外の様子を見て、現地人を除けば、誰も夜の八時だと信じる者はいないだろう。

今日は午前中に過去の日記を編集し、非線形ダイナミクスに関する論文を二本ほど読んだ。午後からは、昼食後すぐに作曲実践をし、その後にバルトーク博物館で購入した小冊子に目を通した。バルトークが持っていた思想とその生き様をより深く理解しなければならない。それを促してくれるものとして、同じくバルトーク博物館で購入した“My Father (2002)”を読もうと思う。この書籍は、バルトークの実の息子であるピーター・バルトークによって執筆されたものだ。実際にバルトークと一緒に暮らしていた息子の視点には、バルトークをより深く理解する上での貴重な事柄が描かれているだろう。

バルトークの書籍を読み終えた後、ワルシャワの書店で購入した哲学書に目を通していた。ミシェル・フーコーの一連の書籍をじっくりと読み進める必要がある、と改めて思った。フーコーの指摘の中で、私が最近よく思っていることに関係する事柄があった。それは、科学的な知というものは、人々に力を与えるというよりも、社会的なコントロールをするための手段として活用される傾向にあるというものだ。

例えば、近年日本の社会の中で普及し始めている成人発達理論に関しても、そこに内包されている知が真に人々の発達を促す形で活用されているというよりも、下手をすると、本来発達を支援するために存在していたはずの知が歪曲されて普及し、結果的に集合的な発達を阻害することに繋がりうる危険性がすでに見え隠れしている。

端的には、本来成人発達理論に関する知の本質には、自己の諸々の囚われから私たちを真に開放するという重要な役割があるが、そうした本質が骨抜きにされ、むしろ自己への束縛を強化しかねない形でその知が普及されつつあるように思える。これはもしかすると、成人発達理論だけに当てはまることではなく、他の科学領域の知についても当てはまるかもしれない。ただし、とりわけ成人発達理論というものが本来私たちを解放していくものであるという本質を考えると、今の普及状況には大きな危機感を抱く。

科学的な知の歪曲化を是正するためには、フーコーが述べているように、成人発達理論の知というものをある意味哲学的な姿勢で吟味していくという姿勢が求められるだろう。哲学的な姿勢というのは、具体的には、成人発達理論の本質に立ち返ることや、そもそも発達を取り巻く社会的な物語の存在と構造に敏感になり、それを検証していくということだ。あるいは、成人発達理論の知というもの

がどのような形で生まれてきたものなのかを歴史的な観点で吟味することなども含まれる。

ただし、個人的にとりわけ重要だと思われるのは、現在普及され始めている発達理論がどのような前提条件のもとに、どのような文脈でどのような物語がどのように語られているかをつぶさに検証することだと思う。日本で普及され始めている成人発達理論の知は間違いなく、日本社会の中にある独自な文脈の中で独自な物語として構築されつつある。物語の背景にある文脈、物語構造及びその内容を真剣に検討する時期を私たちは迎えているように思えて仕方ない。

これを怠る時、成人発達理論の知は私たちを解放し、より自己を深めてくれるどころか、私たちを自己の囚われにさらに束縛し、個人及び集合的な発達を阻害することを招いてしまうだろう。私はそのような危機感を持っている。フローニンゲン：2018/5/1（火）20:13

No.998: Japaneseness and Universalness

A couple of weeks ago, I encountered my Japaneseness that is indelible, inherent, and precious to me. Then I began to discover the universalness (≈universality) inside myself (≈my psyche), which can reside in the realm of human souls. Groningen, 10:07, Saturday, 5/26/2018